

---

SPARC Enterprise サーバ

ハードウェアプラットフォームガイド

for Oracle Solaris 10

---





---

# まえがき

## 本書の目的

本書は、SPARC Enterprise サーバを導入する際に必要な情報や注意事項について説明します。

## 本書の読者

本書は、Oracle Solaris をインストールし、システムを管理するシステム管理者を対象にしています。

本書を読むためには、システム管理者としての一般的な知識が必要です。

## 本書の構成

本書は、次の構成になっています。

- 第1章 インストールする前に  
この章では、インストールする前に確認しておくべき情報について説明します。
- 第2章 インストール時の注意  
この章では、Oracle Solaris をインストールする際の注意事項を説明します。
- 第3章 インストール後の作業  
この章では、インストール後に必要な作業について説明します。
- 第4章 運用時の注意  
この章では運用時の注意事項について説明します。
- 第5章 バグ情報／注意事項  
この章では、Oracle Solaris のバグおよび注意事項について説明します。

## 関連マニュアル

SPARC Enterprise シリーズのマニュアルは、以下の web サイトでダウンロードできます。

日本語サイト:

<http://jp.fujitsu.com/platform/server/sparcenterprise/manual/>

グローバルサイト:

<http://www.fujitsu.com/sparcenterprise/manual/>

## 表記上の規則

字体または記号	意味	記述例
<b>AaBbCc123</b>	ユーザーが入力するコマンドを示します。	# <b>ls -l</b> <Return>
『』	参照するマニュアルの書名を示します。	『SPARC Enterprise サーバハードウェアプラットフォームガイド』を参照してください。

---

---

## プロンプトの表記について

シェル	プロンプト表記
XSCF	XSCF>
Cシェル	machine-name%
Cシェルスーパーユーザー	machine-name#
Bourne シェルおよびKorn シェル	\$
Bourne シェルおよびKorn シェルスーパーユーザー	#
OpenBoot PROM	ok

## 高度な安全性が要求される用途への使用について

本製品は、一般事務用、パーソナル用、家庭用、通常の産業用等の一般的用途を想定して設計・製造されているものであり、原子力施設における核反応制御、航空機自動飛行制御、航空交通管制、大量輸送システムにおける運行制御、生命維持のための医療用機器、兵器システムにおけるミサイル発射制御など、極めて高度な安全性が要求され、仮に当該安全性が確保されない場合、直接生命・身体に対する重大な危険性を伴う用途（以下「ハイセイフティ用途」という）に使用されるよう設計・製造されたものではございません。お客様は、当該ハイセイフティ用途に要する安全性を確保する措置を施すことなく、本製品を使用しないでください。ハイセイフティ用途に使用される場合は、弊社の担当営業までご相談ください。

## 輸出管理規制について

本ドキュメントを輸出または第三者へ提供する場合は、お客様が居住する国および米国輸出管理関連法規等の規制をご確認のうえ、必要な手続きをおとりください。

## 登録商標について

Oracle と Java は、Oracle Corporation およびその子会社、関連会社の米国及びその他の国における登録商標です。文中の社名、商品名等は各社の商標または登録商標である場合があります。

すべての SPARC 商標は、米国 SPARC International, Inc. のライセンスを受けて使用している同社の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

平成 19 年 3 月

平成 27 年 12 月 第 18 版

お願い

- 本書を無断で他に転載しないようお願いします。
- 本書は予告なしに変更されることがあります。

All Rights Reserved, Copyright© 富士通株式会社 2007 – 2015

---

---

# 目次

第 1 章	インストールする前に.....	1
1.1	スワップ領域の見積り.....	1
1.2	DVD ドライブの設定.....	1
1.3	インストールのながれ.....	1
1.4	Oracle Solaris のライセンス.....	3
1.5	Oracle Solaris メディアパックの使用条件.....	3
第 2 章	インストール時の注意.....	5
2.1	Oracle Solaris 登録ウィザード.....	5
2.2	st ドライバのメッセージ.....	5
2.3	NFSv4 の設定.....	5
2.4	Oracle Solaris 自動登録.....	6
2.5	キーボードの選択.....	8
2.6	SPARC Enterprise T1000 サーバおよび SPARC T3-4/T4-4 サーバの場合.....	9
2.7	その他の注意事項.....	9
第 3 章	インストール後の作業.....	11
3.1	大容量メモリ搭載時の設定.....	11
3.2	SPARC Enterprise M8000/M9000 サーバの DVD ドライブユニットおよびテープユニットの組み込み、切り離しについて(Solaris 10 OS 11/06 のみ).....	12
3.3	I/O デバイスの故障箇所が誤って表示される問題について.....	12
第 4 章	運用時の注意.....	15
4.1	OpenBoot 環境への移行操作について.....	15
4.2	UNIX ファイルシステム(UFS)形式の CD-ROM/DVD-ROM について.....	15
4.3	SPARC Enterprise T1000/T2000/T5120/T5140/T5220/T5240/T5440 サーバの TTYA ポートについて.....	15
4.4	インスタンス番号優先順位について.....	16
4.5	SPARC Enterprise T2000/T5120/T5220 サーバの基本ネットワークインターフェース(e1000g)の動作モード変更について.....	16
4.6	SPARC Enterprise T1000 サーバの基本ネットワークインターフェース(bge)に対する JumboFrame のサポートについて (Solaris 10 OS 11/06 のみ).....	17
4.7	Oracle Solaris 標準のファイバチャネルドライバを使用時の注意事項.....	17
4.7.1	I/O 性能について.....	17
4.7.2	マルチホスト接続について.....	17
4.8	SPARC Enterprise T5140/T5240 サーバにおいて、XAUI カードを搭載するとオンボードネットワークポートが無効になることについて.....	18
4.9	SPARC Enterprise T5440 サーバにおいて、XAUI カードを搭載するとオンボードネットワークポートが無効になることについて.....	18
4.10	SPARC Enterprise M3000/M4000/M5000/M8000/M9000 サーバの DSCP インターフェースについて.....	18
第 5 章	バグ情報/注意事項.....	19



---

# 第1章 インストールする前に

この章では、インストールする前に確認しておくべき情報について説明します。

## 1.1 スワップ領域の見積り

スワップサイズを決定する際には、アプリケーションの消費するスワップサイズと、物理メモリのサイズを考慮する必要があります。

アプリケーション起動中にスワップ領域が不足すると、異常終了する危険性があります。そのため、システムで使用される全アプリケーションの、消費スワップサイズ（合計）を確保してください。

また、システムクラッシュ時には、メモリーイメージが/etc/vfstab ファイルの最初に書かれているスワップ領域に書き込まれ、システム再起動時にスワップ領域内のメモリーイメージをクラッシュダンプファイルとして/var/crash/hostname ディレクトリ配下にコピーします。

正常にクラッシュダンプファイルを採取するために、以下の表に従って/etc/vfstab ファイルの最初に書かれているスワップ領域のサイズを設定してください。

表 1.1 スワップ領域

システム	物理メモリ	スワップサイズ
SPARC Enterprise	32G バイト未満	2 G バイト以上
T1000/T2000/T5120/T5140/T5220 /T5240/T5440/M3000/M4000/M5000 /M8000/M9000 サーバ	32G バイト以上 128G バイト未満	4 G バイト以上
SPARC T3-1/T3-2/T3-4/T4-1/T4-2 /T4-4 サーバ	128G バイト以上 256G バイト未満	8 G バイト以上
	256 G バイト以上	物理メモリの 6%以上

### 注意

クラッシュ時のシステムの使われ方によっては、スワップ領域に書き込まれるメモリーイメージのサイズが大きくなる場合があります。スワップサイズに比べてメモリーイメージの方が大きい場合、クラッシュダンプファイルを採取することはできません。この場合、スワップ領域を変更して、スワップサイズを大きくするか、`dumpadm(1M)`コマンドを使用してダンプの出力先を変更してください。`dumpadm(1M)`の使用方法は、`man pages`を参照してください。

## 1.2 DVD ドライブの設定

SPARC Enterprise M8000/M9000 サーバで、DVD ドライブを使う場合には、`eXtended System Control Facility (XSCF)` の `cfgdevice(8)` を使用して設定する必要があります。

詳細は、『SPARC Enterprise M3000/M4000/M5000/M8000/M9000 サーバ XSCF ユーザーズガイド』を参照してください。

## 1.3 インストールのながれ

インストールのながれは以下のとおりです。

- 
1. SPARC Enterprise M8000/M9000 サーバの場合で、Oracle Solaris DVDを使ってOracle Solarisをインストールする場合には、DVD-ROMドライブの設定を行う。(詳細は、『SPARC Enterprise M3000/M4000/M5000/M8000/M9000 サーバ XSCFユーザーズガイド』を参照してください。)
  2. Oracle Solarisをインストールする。
  3. /etc/systemに以下の設定を追加する。

SPARC Enterprise T1000/T2000/T5120/T5140/T5220/T5240/T5440 サーバの場合

```
set autoup=60 (注 1)
set pcie:pcie_aer_ce_mask=0x2001 (注 2)
set pcie_expected_ce_mask = 0x2001 (注 6)
set maxfastscan=0x2000
```

SPARC Enterprise M3000/M4000/M5000/M8000/M9000 サーバの場合

```
set autoup=60 (注 1)
set drmach:fmem_timeout=30 (注 2)
set pcie:pcie_aer_ce_mask=0x2001 (注 2)
set heaplp_use_stlb=0 (注 3)
set mc-opl:mc_max_rewrite_loop=20000 (注 4)
set drmach:drmach_disable_mcopy = 1 (注 5)
set pcie_expected_ce_mask = 0x2001 (注 6)
set maxfastscan=0x2000
```

SPARC T3-1/T3-2/T3-4/T4-1/T4-2/T4-4 サーバの場合

```
set autoup=60 (注 1)
set maxfastscan=0x2000
```

注 1) 搭載メモリにより、設定値が異なります。詳細は、“3.1 大容量メモリ搭載時の設定”を参照してください。

注 2) Solaris 10 8/07 以降では不要です。

注 3) 125100-04 以降を適用するまでは、システムリブート時に以下のメッセージが表示されますが、問題ありませんので無視してください。Solaris 10 10/08 以降では不要です。

```
sorry, variable 'heaplp_use_stlb' is not defined in the 'kernel'
```

注 4) Solaris 10 5/08 以降では不要です。

注 5) Dynamic Reconfiguration を使用する場合に必要です。

注 6) Solaris 10 10/08 以降では不要です。137137-09 を適用する場合には追加しないでください。

4. 最新の推奨&セキュリティパッチクラスタを適用する。  
最新の推奨&セキュリティパッチクラスタには、SPARC Enterprise サーバの必須パッチなどの重要な修正が含まれています。
5. SPARC Enterprise サーバにEnhanced Support Facility(ESF)が添付されている場合は、ESFをインストールする。
6. Oracle Solaris 10 用のPTFを適用する。
7. PTFに含まれているESF用クラスタを適用する。
8. SPARC Enterprise T1000/T2000サーバの場合は、Sun Explorer Data Collector 5.7以降をインストールする。SPARC Enterprise T5120/T5140/T5220/T5240/T5440サーバの場合は、Sun Explorer Data Collector 5.10以降をインストールする。SPARC T3-1/T3-2/T3-4/T4-1/T4-2/T4-4サーバの場合は、Oracle Explorer Data Collector 6.5以降をインストールする。SPARC Enterprise Mシリーズサーバの場合は、Oracle Explorer Data Collector 6.9以降をインストールする。

推奨&セキュリティパッチ、推奨&セキュリティパッチクラスタおよび PTF は、当社 SupportDesk サービスをご契約いただくことで入手が可能です。

Sun Explorer Data Collector / Oracle Explorer Data Collector の入手方法は、当社技術員にお尋ねください。



## 1.4 Oracle Solaris のライセンス

Oracle Solaris ライセンス（使用権）は、SPARC Enterprise 本体処理装置、および OS サポートを含む SupportDesk サービスに含まれており、それぞれの詳細は以下のとおりです。

- 本体処理装置(OS サポートなし) には、プレインストールされている Oracle Solaris のバイナリーのみ商用利用する権利が含まれています。
- 本体処理装置(OS サポート[平日]1 年間付) には、プレインストールされている Oracle Solaris のバイナリーを商用利用する権利と、富士通出荷後 1 年間はプレインストールされている Oracle Solaris のバイナリーに変更して商用利用する権利が含まれています。
- OS サポートを含む SupportDesk サービスには、サポート期間中にプレインストールされている Oracle Solaris のバイナリー以外に変更して商用利用する権利が含まれています。
- Oracle Solaris のメディアパックには Oracle Solaris ライセンス（使用権）は含まれていません。

## 1.5 Oracle Solaris メディアパックの使用条件

Oracle Solaris メディアパックの使用条件は、本体処理装置、OS サポートの手配により、表 1.2 のとおり異なりますので、本体処理装置にプレインストールされている Oracle Solaris バイナリーの版数から手配するメディアパックの Oracle Solaris 版数への変更可否にはご注意ください。

また、当社が販売した Oracle Solaris メディアパックは、当社が販売した本体処理装置でのみ使用することができます。

表 1.2 Oracle Solaris メディアパックの使用条件

手配/契約内容			SPARC Enterprise 本体処理装置にプレインストールされているバイナリーの版数		
本体処理装置	出荷後の経過期間	OS サポートを含む SupportDesk サービス	メディアパック	Oracle Solaris 11.X	Oracle Solaris 11.Y
本体処理装置 (OS サポート [平日] 1 年間付)	1 年以内	契約あり / 契約なし	Oracle Solaris 11.X	○ 再インストール可	○ 変更可
	2 年目以降	契約あり / 契約なし			○ 変更可
本体処理装置 (OS サポート なし)	—	契約あり			×
		契約なし			○ 変更可
本体処理装置 (OS サポート [平日] 1 年間付)	1 年以内	契約あり / 契約なし	Oracle Solaris 10 X/YY	○ 変更可	○ 変更可
	2 年目以降	契約あり / 契約なし			×
本体処理装置 (OS サポート なし)	—	契約あり			○ 変更可
		契約なし			×

---

---

## 第2章 インストール時の注意

この章では、Oracle Solaris をインストールする際の注意事項を説明します。

### 2.1 Oracle Solaris 登録ウィザード

root ユーザーでログインする場合、「Solaris 登録ウィザード(Solaris Registration Wizard)」のウィンドウが表示されることがありますが、ユーザー登録を実施しないでください。

### 2.2 st ドライバのメッセージ

Oracle Solaris 10 をインストールした後、/kernel/drv/st.conf ファイルを編集した場合、システムのブート時に以下のメッセージが出力される場合があります。

```
デバイスバス名 (stXX):  
<data-property-name> options value invalid bits set: 0x4000
```

XX は、st ドライバのインスタンス番号を示します。

このメッセージは、/kernel/drv/st.conf ファイル内の <options> の bit 設定 : 0x4000 (ST\_BUFFERED\_WRITES)が無効であることを示していますが、Oracle Solaris 10 では、ST\_BUFFERED\_WRITES を無視するため、メッセージが出力されてもシステムに影響はありません。

メッセージが表示されないようにするためには、以下の例のように /kernel/drv/st.conf の <options>設定で、0x4000 の bit を指定しない設定にしてください。

<変更前>

```
Tape-config-list=<vid+pid>, <pretty print>, <data-property-name>;  
<data-property-name> = 1,0x34,0,0xd639,4,0x00,0x8c,0x8c,0x8c,3;
```

<変更後>

```
Tape-config-list=<vid+pid>, <pretty print>, <data-property-name>;  
<data-property-name> = 1,0x34,0,0x9639,4,0x00,0x8c,0x8c,0x8c,3;
```

### 2.3 NFSv4 の設定

Solaris 10 11/06 までは、Solaris 10 をインストールした後の最初のブート時に NFSv4 についての問合せが発生します。NFSv4 のドメイン設定を行う場合は、「yes」を入力してください。NFSv4 のドメイン設定を行わない場合は、「no」を入力してください。

```
This system is configured with NFS version 4, which uses a domain  
name that is automatically derived from the system's name services.  
The derived domain name is sufficient for most configurations. In a  
few cases, mounts that cross different domains might cause files to  
be owned by "nobody" due to the lack of a common domain name.
```

```
Do you need to override the system's default NFS version 4 domain  
name (yes/no) ? [no] :
```

Solaris 10 8/07 以降では、インストール中に NFSv4 についての問合せが発生します。

```
- NFSv4 ドメイン名 -----
NFS version 4 はシステムのネームサービスから自動的に取得された
ドメイン名を使用します。大半の設定には、取得されたドメイン名を
使用できます。ときどき起きる例として、共通ドメイン名が存在しないために、
ドメインの境界をまたがるマウントで、ファイルの所有者が
"nobody" と表示されることがあります。

現在の NFSv4 デフォルトドメイン: ""

NFSv4 ドメインの設定
-----
[X] システムによって取得された NFSv4 ドメインを使用します
[ ] 別の NFSv4 ドメインを指定します
```

## 2.4 Oracle Solaris 自動登録

Oracle Solaris 10 9/10 から、Oracle Solaris 自動登録メニューが追加されました。以下の手順に従って、自動登録を無効にしてください。

1. 以下のメニューが表示され、情報を入力するよう要求されますが、何も入力せずにインストールを続けます。なお、“My Oracle Support の情報を使用して登録します。”は選択しなくても構いません。

### 日本語の場合

```
- Solaris 自動登録情報の入力: -----

製品およびサービス向上のため、Oracle Solaris はリポート後に構成データを
Oracle に送信します。

ご自身の使用のために、使用中のバージョンの Oracle Solaris
を登録してこのデータを取得できます。登録しない場合、データを匿名で送信します。

送信される構成データの内容およびこの機能の制御方法の詳細については、リリース
ノートまたは www.oracle.com/goto/solarisautoreg を参照してください。

> 矢印キーを使用してオプションを選択し、Return キーを押して
[X] マークを付けてください。

-----

[X] My Oracle Support の情報を使用して登録します。

-----

F2_継続   F6_ヘルプ
```

---

```
- Solaris 自動登録情報の入力: -----  
  
登録するには、次のフィールドに入力してください:  
  
- 既存の My Oracle Support の情報を確認します。  
- プロキシサーバを使用している場合、プロキシ設定を入力します。  
  
送信される構成データの内容およびこの機能の制御方法の詳細については、リリース  
ノートまたは www.oracle.com/goto/solarisautoreg を参照してください。  
  
My Oracle Support ユーザー名:  
My Oracle Support Password:  
  プロキシサーバーのホスト名:  
  プロキシサーバーのポート番号:  
  HTTP プロキシのユーザー名:  
  HTTP プロキシのパスワード:  
  
-----  
F2_継続   F6_ヘルプ
```

#### 英語の場合

```
- Provide Solaris AutoRegistration Info:-----  
  
To improve products and services, Oracle Solaris communicates configuration  
data to Oracle after rebooting.  
  
You can register your version of Oracle Solaris to capture this data for  
your use, or the data is sent anonymously.  
  
For information about what configuration data is communicated and how to  
control this facility, see the Release Notes or  
www.oracle.com/goto/solarisautoreg.  
  
> Use the arrow keys to select the option and press Return to  
mark it [X].  
  
-----  
[X] I would like to register using My Oracle Support information.  
  
-----  
F2_Continue   F6_Help
```

```
- Provide Solaris AutoRegistration Info:-----
To register, complete the following fields:
- Confirm your existing My Oracle Support information.
- If using a proxy server, provide the proxy settings.

For information about what configuration data is communicated and how to
control this facility, see the Release Notes or
www.oracle.com/goto/solarisautoreg.

My Oracle Support User Name:
My Oracle Support User Password:
Proxy Server Host Name:
Proxy Server Port Number:
HTTP Proxy User Name:
HTTP Proxy Password:

-----
F2_Continue    F6_Help
```

2. インストール後のリブート方法を選択します。
  - GUI インストールの場合は、「インストーラ・オプション」メニューの「インストール後に、自動でリブートするようにしますか？」に対して、“いいえ”を選択する。
  - テキストインストールの場合は、「インストール後にリブートしますか？」メニューで“手動リブート”を選択する。
3. インストールが完了したら、リブートを実行する前に以下の方法で端末エミュレータを開きます。
  - GUI インストールの場合は、右クリックして端末エミュレータを開く。
  - テキストインストールの場合は、「!」を入力する。
4. `/a/var/tmp/autoreg_config` ファイルを削除します。
5. `reboot(1M)` コマンドを実行します。

Oracle Solaris JumpStart および Oracle Solaris Live Upgrade を使用する場合は、『Oracle Solaris 10 9/10 ご使用にあたって』の“自動登録を無効化する方法”を参照してください。

## 2.5 キーボードの選択

Solaris 10 OS 8/07 以降のインストール中に、キーボードの選択を要求される場合があります。キーボードが接続されていない場合には、デフォルト値(US-English)を選択し、次に進んでください。

```
- Configure Keyboard Layout -----
Please specify the keyboard layout from the list below.

> To make a selection, use the arrow keys to highlight the option and
  press Return to mark it [X].

Keyboard Layout
-----
^  [ ] Slovak
|  [ ] Slovenian
|  [ ] Spanish
|  [ ] Swedish
|  [ ] Swiss-French
|  [ ] Swiss-German
|  [ ] Taiwanese
|  [ ] TurkishQ
|  [ ] TurkishF
|  [ ] UK-English
-  [X] US-English

-----
F2_Continue  F6_Help
```

## 2.6 SPARC Enterprise T1000 サーバおよび SPARC T3-4/T4-4 サーバの場合

SPARC Enterprise T1000 サーバおよび SPARC T3-4/T4-4 サーバには、CD/DVD ドライブが接続できませんので、Oracle Solaris をインストールする場合は、ネットワークインストールでインストールしてください。

## 2.7 その他の注意事項

以下の環境では、インストールサーバの構築および設定が必要になります。

- Dual Gigabit Ethernet カード (SE0X7GD1F, SE0X7GD2F)、Quad Gigabit Ethernet カード (SE0X7GQ1F, SE0X7GQ2F) を使用してネットワークインストールを行う環境
- デュアルチャネル Ultra320 SCSI カード (SE0X7SC1F, SE0X7SC2F) を使用して、外付け増設ファイルユニットからシステムの起動を行う環境
- SAS カード (SE0X7SA1F) を使用して、外付け増設ファイルユニットおよび RAID 装置からシステムの起動を行う環境

インストールサーバの構築および設定の際には、以下のマニュアルを参照してください。

- インストールサーバ構築ガイド I/O デバイスドライバ編 (SPARC Enterprise)

なお、上記のマニュアルは、各カードに添付されている以下の CD-ROM 内に PDF 形式で含まれています。

- FUJITSU PCI GigabitEthernet 3.0/4.0 CD-ROM
- FUJITSU ULTRA LVD SCSI Host Bus Adapter Driver 2.0/2.1 CD-ROM

---

---



---

## 第3章 インストール後の作業

この章では、インストール後に必要な作業について説明します。

### 3.1 大容量メモリ搭載時の設定

大容量のメモリを搭載するシステムでは、`fsflush` デーモンが動作し続けて、CPU 時間を消費する問題が発生します。

`fsflush` デーモンは、定期的にメモリの内容を走査して、ディスクに未反映の更新されたデータおよび、メタデータ(ファイルシステムの管理情報)があれば、それらをディスクに書込みます。

そのため、大容量のメモリを搭載するシステムでは、メモリの内容を走査する処理に時間がかかり、`fsflush` デーモンが一個の CPU を占有することによって、システム性能に影響を与えることがあります。

`fsflush` デーモンの起動間隔は、以下のカーネルパラメタの設定により変更することができます。

**tune\_t\_fsflushr** `fsflush` デーモンを起動する間隔を秒単位で指定します。省略時は、1 秒です。

**autoup** `fsflush` デーモンが全メモリを走査する間隔を秒単位で指定します。この値を大きくすると、更新されたデータがメモリに置かれている時間が長くなります。省略時は、30 秒です。

これらのカーネルパラメタの値を大きくすることにより、CPU 時間を消費する問題が発生しないように調整することができます。

ただし、`tune_t_fsflushr` の設定値をあまり大きくすると、`fsflush` デーモンが一回当りに走査するメモリのサイズが大きくなり、`fsflush` デーモンが動作し続ける時間が長くなります。そのため、`tune_t_fsflushr` は省略時の値から変更しないことを推奨します。

大容量(32GB 以上)のメモリを搭載するシステムでは、`fsflush` デーモンがメモリを走査する処理に時間がかかり、30 秒 (`autoup` の省略時の値) 以内に全メモリを走査することができない可能性があります。30 秒以内に全メモリを走査することができない場合は、`fsflush` デーモンが全メモリを走査する間隔が一定にならず、`fsflush` デーモンが一個の CPU を占有することにより、システム性能に影響を与えることがあります。この場合、`mpstat(1M)` コマンドによる統計情報を採取すると、定期的にある一個の CPU の `sys` が 100%に近い値となることが観測できます。

そのため、`autoup` の値をシステムのメモリ容量に応じて変更する必要があります。推奨値は表 3.1のとおりです。なお、複数のドメインに分割可能なシステムにおいては、ドメイン内のメモリ容量を意味します。

表 3.1 autoup の推奨値

メモリ容量 [ギガバイト]	autoup [秒]
～32 未満	30
32 以上～64 未満	60
64 以上～128 未満	120
128 以上～256 未満	240
256 以上～	480

ただし、autoup の設定値をあまり大きくすると、停電等により突然電源が切断された場合やシステムがパニックした場合に、更新されたデータがディスクに反映されず、データを消失してしまう可能性が大きくなるため、上記の推奨値より大きな値には設定しないでください。

変更するカーネルパラメータを/etc/system に追加して、システムを再起動(リブート)してください。

例) autoup を 60 に設定する場合

```
set autoup=60
```

## 3.2 SPARC Enterprise M8000/M9000 サーバの DVD ドライブユニットおよびテープユニットの組み込み、切り離しについて (Solaris 10 OS 11/06 のみ)

Solaris 動作中に `cfgadm(1M)` コマンドを使用して、DVD ドライブユニットおよびテープドライブユニットのドメインへの組み込み、もしくは切り離しは行わないで下さい。

DVD ドライブユニット、あるいはテープドライブユニットを使用する場合、以下の手順でドメインへの組み込み/切り離しを行ってください。

1. `shutdown(1M)` コマンドを実行して、`ok` プロンプトにしてください。

```
# shutdown -i0 -y -g0 <Return>
```

2. XSCF の `cfgdevice(8)` コマンドにて、操作してください。

(詳細は、『SPARC Enterprise M3000/M4000/M5000/M8000/M9000 サーバ XSCF ユーザーズガイド』を参照してください。)

## 3.3 I/O デバイスの故障箇所が誤って表示される問題について

I/O デバイスのハード故障が発生した場合、Solaris の障害 (CR#6536564) により以下の問題が発生することがあります。

### 現象・影響：

IOU#0 以外の IOU (配下のデバイスを含む) でハード故障が発生した場合、システム監視機構 (XSCF) に誤った故障箇所が通知され、リモート保守サービスなどが誤った故障箇所を通報することがあります。

本障害が発生した場合、XSCF の `showlogs(8)`、`showstatus(8)`、`showhardconf(8)` などのコマンドも誤った故障箇所を表示します。

< showlogs(8) コマンドの実行結果の例 >

---

IOU#1 でハード故障が発生したにもかかわらず、故障箇所 (FRU) が IOU#0 と表示されます。

```
XSCF> showlogs error
...
Date: May 02 10:19:08 JST 2007  Code: 80000000-c1000000-12ce000000000000
  Status: Warning                Occurred: May 02 10:19:08.857 JST 2007
  FRU: /IOU#0
  Msg: PCI access error
```

**環境・発生条件：**

- SPARC Enterprise M4000/M5000/M8000/M9000 サーバの場合。かつ、
- Solaris 10 11/06 の場合。かつ、
- IOU#0 以外の IOU (配下のデバイスを含む) でハード故障が発生した場合。

**回避方法：**

上記の問題を回避するため、123839-07 以降のパッチを適用後に以下を実施してください。

1. ドメインにrootユーザーでログインし、ioboard.so を変名します。

```
# cd /usr/platform/SUNW,SPARC-Enterprise/lib/fm/topo/plugins <Return>
# mv ioboard.so ioboard.so.orig <Return>
```

2. fmd サービスを再起動します。

```
# svcadm restart fmd <Return>
```

上記を設定後、ドメイン側で以下のエラーメッセージがコンソールに表示された場合は、サポート担当にご連絡ください。

```
SUNW-MSG-ID: SUNOS-8000-1L, TYPE: Defect, VER: 1, SEVERITY: Minor
EVENT-TIME: Sun May 6 18:22:24 PDT 2007
PLATFORM: SUNW,SPARC-Enterprise, CSN: BE80601007, HOSTNAME:
col2-ff-em7-d0
SOURCE: eft, REV: 1.16
EVENT-ID: cbfc5646-ce37-e504-f4d4-ff3a41bd415b
DESC: The EFT Diagnosis Engine encountered telemetry for which it is unable
to produce a diagnosis. This may indicate an incomplete EFT file provided
or a defect in the diagnosis algorithm. Refer to
http://sun.com/msg/SUNOS-8000-1L for more information.
AUTO-RESPONSE: Error reports from the component will be logged for
examination by Sun.
IMPACT: Automated diagnosis and response for these events will not occur.
REC-ACTION: Run pkgchk -n SUNWfmd to ensure that fault management software
is installed properly. Contact Sun for support.
```

**注意事項：**

- 125369-05 以降が適用されている場合は、上記の回避方法は必要ありません。125369-05 以降を適用した環境では、上記の回避方法は実施しないでください。
- 上記の回避方法を実施していないシステムで I/O デバイスの故障が発生した場合、サポート担当にご連絡ください。

---

---

---

## 第4章 運用時の注意

この章では運用時の注意事項について説明します。

### 4.1 OpenBoot 環境への移行操作について

システムの動作中に強制的に OpenBoot 環境に移行すると、データが破壊されるおそれがあります。意図しない break 信号を無効にするために、以下の設定を行ってください。

**SPARC Enterprise T1000/T2000/T5120/T5140/T5220/T5240/T5440 サーバおよび  
SPARC T3-1/T3-2/T3-4/T4-1/T4-2/T4-4 サーバの場合**

1. /etc/default/kbd ファイルを以下のように編集します。

```
KEYBOARD_ABORT=disable
```

2. /etc/default/kbd の設定を反映します。

```
# kbd -i <Return>
```

**SPARC Enterprise M3000/M4000/M5000/M8000/M9000 サーバの場合**

処理装置のオペレータパネルの MODE スイッチを“Locked”にし、各ドメインの Secure Mode を有効にしてください。Secure Mode を有効にする方法は、『SPARC Enterprise M3000/M4000/M5000/M8000/M9000 サーバ XSCF リファレンスマニュアル』の setdomainmode(8) を参照してください。

### 4.2 UNIX ファイルシステム(UFS)形式の CD-ROM/DVD-ROM について

Oracle Solaris 以外の OS 用に作成された UNIX ファイルシステム(UFS)形式の CD-ROM/DVD-ROM は使用しないでください。

UNIX ファイルシステム(UFS)形式であっても、OS が異なるとファイル構造が異なる場合があります。そのような CD-ROM/DVD-ROM を使用すると、システムダウンなどのシステムに重大な問題を引き起こす可能性があります。

### 4.3 SPARC Enterprise T1000/T2000/T5120/T5140/T5220/T5240/T5440 サーバの TTYA ポートについて

TTYA ポートは一般的なシリアル装置を接続するためのポートであり、コンソールとして使用できません。

OpenBoot PROM の環境変数 “input-device” および “output-device” に “ttya” を設定しないでください。

詳細は、『SPARC Enterprise T1000 サーバ アドミニストレーションガイド』、『SPARC Enterprise T2000 サーバ アドミニストレーションガイド』、『SPARC Enterprise T5120/T5220 サーバ アドミニストレーションガイド』、『SPARC Enterprise T5140/T5240 サーバ アドミニストレーションガイド』または『SPARC Enterprise T5440 サーバ アドミニストレーションガイド』を参照してください。

さい。

## 4.4 インスタンス番号優先順位について

オプションカードを新規に追加する場合、カード上のデバイスノードに割り付けられるインスタンス番号が予測不可能になる可能性があります。

Dynamic Reconfiguration/PCI Hot Plug による新規追加も該当します。Dynamic Reconfiguration/PCI Hot Plug による交換は該当しません。

デバイスノードのインスタンス優先順位に従ってインスタンス番号を割り付ける必要がある場合は、以下の手順に従ってください。

1. Oracle Solarisが動作している状態で、`/etc/system` に以下の設定を追加する。

```
set mtc_off=1
```

2. Oracle Solarisをリブートする。
3. オプションカードを挿入する。

この設定を行うと、システムのリブートが遅くなることがあります。システムのリブートに時間がかかることで、運用に影響がある場合は、この設定を削除し、システムをリブートしてください。

## 4.5 SPARC Enterprise T2000/T5120/T5220 サーバの基本ネットワークインターフェース(e1000g)の動作モード変更について

SPARC Enterprise T2000/T5120/T5220 サーバの基本ネットワークインターフェース(e1000g)で、デフォルトの動作モードから変更する場合の注意事項について説明します。

SPARC Enterprise T2000/T5120/T5220 サーバの基本ネットワークインターフェース(e1000g)のデフォルトの動作モードは、オートネゴシエーションが有効、かつ、1Gbps(1000Mbps)全二重となっています。通常、オートネゴシエーションが有効の接続相手装置（スイッチングハブ等）と接続する場合は、動作モードの変更を行う必要はありません。動作モードの変更を行う必要がある環境で、`ndd(1M)`コマンドを使用する場合は、以下の注意が必要です。

e1000g ドライバは、`ndd(1M)`コマンドを使用して、オートネゴシエーションを無効に設定し、かつ、動作モードを設定する方法が、他のドライバと異なります。

設定方法は、以下のとおりです。

```
# ndd -set /dev/e1000g<instance-number> adv_autoneg_cap 0 <Return>

# ndd -set /dev/e1000g<instance-number> force_speed_duplex value
<Return>
```

以下の表に示す値を *value* に指定し、動作モードを設定します。

value	動作モード
1	10Mbps 半二重
2	10Mbps 全二重
3	100Mbps 半二重
4	100Mbps 全二重

詳細は、e1000g(7D)の `man` ページを参照してください。

---

実行例：

e1000g0 で、オートネゴシエーション無効、100Mbps、半二重に設定する場合

```
e1000g0 インターフェースのオートネゴシエーションを無効にします。
# ndd -set /dev/e1000g0 adv_autoneg_cap 0 <Return>

e1000g0 インターフェースの動作モードを 100Mbps 半二重に設定します。
# ndd -set /dev/e1000g0 force_speed_duplex 3 <Return>
```

注意事項

- ndd(1M)コマンドで設定変更した場合は、接続相手装置でも設定変更を行い、動作モードを一致させて運用してください。
- 1000Mbps の場合、オートネゴシエーション無効の設定はサポートされません。

## 4.6 SPARC Enterprise T1000 サーバの基本ネットワークインターフェース(bge)に対する JumboFrame のサポートについて (Solaris 10 OS 11/06 のみ)

SPARC Enterprise T1000 サーバの基本ネットワークインターフェース(bge)のうち、ポート 0 とポート 1(bge0 と bge1)は、JumboFrame 設定が未サポートです。

なお、同本体装置においても、ポート 2 とポート 3(bge2 と bge3)は、JumboFrame が指定可能です。

## 4.7 Oracle Solaris 標準のファイバチャネルドライバを使用時の注意事項

Oracle Solaris 標準のファイバチャネルドライバを使用する場合の注意事項について説明します。

- 対象ホストバスアダプタ
  - XSEFC401AF
  - XSEFC402AF
  - XSEFC401AU
  - XSEFC402AU

### 4.7.1 I/O 性能について

4G bps 対応されたディスクアレイ装置を接続した場合、Oracle Solaris の仕様により、読み込み性能が十分に出ないことがあります。

参考値(注 1)

書込み性能 約 365Mbyte/sec

読み込み性能 約 180Mbyte/sec

注 1) 弊社での実測値となります。システム構成により、値が異なることがあります。

### 4.7.2 マルチホスト接続について

複数ホストを 1 台のディスクアレイ(ファイバチャネルスイッチ接続)に接続する場合、以下の注意が必要となります。

- 
- 同一ゾーン内に、複数ホストを接続することは未サポートです。ファイバチャネルスイッチのポートゾーニング機能により、ゾーンの分割を行ってください。

## 4.8 SPARC Enterprise T5140/T5240 サーバにおいて、XAUI カードを搭載するとオンボードネットワークポートが無効になることについて

10GbE XFP XAUI Adapter Card (XAUI カード) をスロット 0 に搭載すると、オンボードネットワークポート 1 (NET1) が無効になります。

XAUI カードをスロット 1 に搭載すると、オンボードネットワークポート 0 (NET0) が無効になります。

詳細は、『SPARC Enterprise T5140/T5240 サーバ プロダクト ノート』を参照してください。

## 4.9 SPARC Enterprise T5440 サーバにおいて、XAUI カードを搭載するとオンボードネットワークポートが無効になることについて

10GbE XFP XAUI Adapter Card (XAUI カード) をスロット 4 に搭載すると、オンボードネットワークポート 1 (NET1) が無効になります。

XAUI カードをスロット 5 に搭載すると、オンボードネットワークポート 0 (NET0) が無効になります。

詳細は、『SPARC Enterprise T5440 サーバ プロダクト ノート』を参照してください。

## 4.10 SPARC Enterprise M3000/M4000/M5000/M8000/M9000 サーバの DSCP インターフェースについて

SPARC Enterprise M3000/M4000/M5000/M8000/M9000 サーバのドメイン側で `ifconfig(1M)` コマンドを実行して表示される DSCP のインターフェース(`sppp0`)の `netmask` の値は、XSCF の `setdscp(8)` コマンドで設定したネットマスクの値と異なる場合があります。

これは、DSCP の通信プロトコルとして使用している PPP(Point to Point Protocol)がネットマスク値を受け渡さないことと、Oracle Solaris の `ifconfig(1M)` コマンドが DSCP インターフェースの IP アドレスのクラスに合わせた `netmask` の値を表示するためです。動作上問題ありませんので無視してください。

ただし、管理をするうえでわかりにくくなるため、`ifconfig(1M)` コマンドで表示される DSCP のサブネットと、LAN などのサブネットを分けることをお奨めいたします。



## 第5章 バグ情報／注意事項

この章では、Oracle Solaris のバグおよび注意事項について説明します。  
バグ情報については、最初に以下のマニュアルをお読みください。

- 『SPARC Enterprise T1000 サーバ プロダクトノート』
- 『SPARC Enterprise T2000 サーバ プロダクトノート』
- 『SPARC Enterprise T5120/T5220 サーバ プロダクトノート』
- 『SPARC Enterprise T5140/T5240 サーバ プロダクトノート』
- 『SPARC Enterprise T5440 サーバ プロダクトノート』
- 『SPARC Enterprise M3000/M4000/M5000/M8000/M9000 サーバ プロダクトノート』
- 『SPARC T3-1/T3-2/T3-4 サーバのご使用上の留意事項』 (注)
- 『SPARC T4-1/T4-2/T4-4 サーバのご使用上の留意事項』 (注)
- 『Solaris 10 ご使用にあたって』

注) これらのドキュメントは、当社担当営業または、お客様専用ホームページ「SupportDesk-Web」より入手してください。

上記のマニュアルに記載されていないバグ情報について説明します。

No.	CR ID	説明
		回避方法
1	6303418	SPARC Enterprise M9000 サーバにおいて、1 ドメインあたりの CPU スレッド数が 170 を超えた場合、ハングアップする場合があります。
		170CPU スレッドを超えないようにしてください。 Solaris の psradm(1M)コマンドを使用して余分な CPU スレッドをオフラインにして、CPU スレッドの数を 1 CPU コアあたり 1 つに制限してください。 例えば、すべての奇数の CPU スレッドをオフラインにするなどです。  この問題は、以下のパッチで修正されました。パッチを適用した後は、回避方法が不要になります。 120011-14 以降 SunOS: 5.10 kernel patch
2	6416224	単一の NIC カードの接続数が 5,000 を超えると、システムパフォーマンスが低下することがあります。
		複数の NIC カードを使用して、ネットワーク接続を分割してください。  この問題は、以下のパッチで修正されました。パッチを適用した後は、回避方法が不要になります。 120011-14 以降 SunOS: 5.10 kernel patch
3	6441349	システム内で I/O エラーが発生したときに、システムがハングアップすることがあります。
		以下のパッチを適用してください。 120011-14 以降 SunOS 5.10: kernel patch

No.	CR ID	説明
		回避方法
4	6449315	Solaris の <code>cfgadm</code> コマンドを実行しても、SPARC Enterprise M8000/M9000 サーバ上のドメインから DVD ドライブが構成解除されません。
		<p><code>cfgadm</code> コマンドで DVD ドライブを構成解除するには、事前にボリューム管理デーモン (<code>vold</code>) を無効にする必要があります。</p> <p><code>vold</code> を無効にするには、<code>/etc/init.d/volmgt stop</code> コマンドを発行してデーモンを停止します。デバイスを組み込んだり切り離したりした後は、<code>/etc/init.d/volmgt start</code> コマンドを発行してデーモンを再起動します。</p>
5	6459540	SPARC Enterprise M4000/M5000/M8000/M9000 サーバの内蔵テープドライブユニットがテープの処理中にタイムアウトすることがあります。
		<p>以下の定義を、<code>/kernel/drv/st.conf</code> に追加してください。</p> <pre>tape-config-list = "SEAGATE DAT    DAT72-000", "SEAGATE_DAT___DAT72-000", "SEAGATE_DAT___DAT72-000"; SEAGATE_DAT___DAT72-000= 1,0x34,0,0x9639,4,0x00,0x8c,0x8c,0x8c,3;</pre> <p>"SEAGATE DAT"と"DAT72-000"の間には、4つの半角スペースがあります。</p>
6	6461283	PCI カードをコールドブートしたときと、ホットプラグしたときでは、「 <code>cache-line-size</code> 」プロパティが異なる場合があります。
		<p>以下のパッチを適用してください。</p> <p>125100-03 以降 SunOS 5.10: Kernel Update patch</p>
7	6466617	PCIe スロットのホットプラグ操作が速すぎると、PCI リーフのリセットが中断されて障害が発生し、 <code>cfgadm: Component system is busy</code> エラーが発生します。
		<p><code>cfgadm -c</code> コマンドを続けて発行するときは、数秒の間隔をおいて発行してください。</p>
8	6472072	ALOM の <code>'break -D'</code> を使用してパニックダンプを採取すると、パニックメッセージが <code>'Unrecoverable hardware error'</code> になります。
		<p>以下のパッチを適用してください。</p> <p>127127-11 以降 SunOS 5.10: kernel patch</p>
9	6472153	SPARC Enterprise Mx000 サーバ以外のサーバ上に Solaris フラッシュアーカイブを作成し、それを SPARC Enterprise Mx000 サーバにインストールすると、コンソールの TTY フラグが正しく設定されません。その結果、コンソールのハングを引き起こすことがあります。
		<p>SPARC Enterprise Mx000 サーバに <code>telnet</code> で入り、コンソールの TTY フラグを以下のようにリセットします:</p> <pre># sttydefs -r console # sttydefs -a console -i "9600 hupcl opost onlcr crtscts" -f "9600"</pre> <p>この作業は一回だけ実行してください。</p> <p>この問題は、以下のパッチで修正されました。パッチを適用した後は、回避方法が不要になります。</p> <p>137046-01 以降 SunOS 5.10: Flash Archive patch</p>

No.	CR ID	説明
		回避方法
10	6481002	PCI-Express カードを使用してネットワークから Solaris をインストールすると、パニックが発生することがあります。
		Sun PCI- Express Dual Gigabit Ethernet Adapter MMF カードまたは Sun PCI- Express Dual Gigabit Ethernet Adapter UTP カードを使用している場合は、これらのカードを使用して Solaris をインストールしないでください。代わりに、オンボードの Gigabit Ethernet など、他のネットワークデバイスを使用してください。
11	6489365	SPARC Enterprise T1000/T2000 サーバのシリアル管理ポートを使って Solaris のコンソール表示が大量に発生すると、システムがパニックすることがあります。
		以下のパッチを適用してください。 125382-01 以降 SunOS 5.10: qcn driver patch
12	6496337	uncorrectable error (UE) パニック後、"cpumem-diagnosis" モジュールのロードに失敗することがあります。システムは正しく機能しますが、通常このモジュールを使用し FMA によって自動的に診断されているイベントは、マニュアルでの診断が必要になります。 例： SUNW-MSG-ID: FMD-8000-2K, TYPE:Defect, VER: 1, SEVERITY: Minor EVENT-TIME: Thu Feb 15 15:46:57 JST 2007 PLATFORM: SUNW,SPARC-Enterprise, CSN: BE80601007, HOSTNAME: col2-ffem7-d0
		問題が発生した場合、以下を実施してください。 1. 以下のファイルを削除してください。 # rm /var/fm/fmd/ckpt/cpumem-diagnosis/cpumem-diagnosis  2. fmdサービスをリスタートしてください。 # svcadm restart fmd 問題を事前に回避する場合、/lib/svc/method/svc-dumpadm の以下の場所に "rm -f /var/fm/fmd/ckpt/cpumem-diagnosis/cpumem-diagnosis"を追加してください。  # # We haven't run savecore on a dump device yet # savedev=none  rm -f /var/fm/fmd/ckpt/cpumem-diagnosis/cpumem-diagnosis  #  この問題は、以下のパッチで修正されました。パッチを適用した後は、回避方法は不要になります。 125369-10 以降 SunOS 5.10: Fault Manager patch
13	6499304	Correctable Error (CE)が多数発生すると、CPU がオフラインにならず、予期しないメッセージがコンソール上に表示されます。 例: SUNW-MSG-ID: FMD-8000-11, TYPE: Defect, VER: 1, SEVERITY: Minor EVENT-TIME: Fri Feb 2 18:31:07 JST 2007 PLATFORM: SPARC-Enterprise, CSN: BE80601035, HOSTNAME: FF2-35-0
		以下のパッチを適用してください。 125369-10 以降 SunOS 5.10: Fault Manager patch

No.	CR ID	説明
		回避方法
14	6502204	<p>CPU UE パニック後、ブート中に、予期しないエラーメッセージがコンソール上に表示されることがあります。</p> <p>例:  SUNW-MSG-ID: FMD-8000-11, TYPE: Defect, VER: 1, SEVERITY: Minor  EVENT-TIME: Tue Jan 9 20:45:08 JST 2007  PLATFORM: SUNW,SPARC-Enterprise, CSN: 2030636002, HOSTNAME: P2-DC1-16-d0</p> <p>以下のパッチを適用してください。  125369-10 以降 SunOS 5.10: Fault Manager patch</p>
15	6502750	<p>OS 動作中に、I/O カードの挿入または取り外しをしても、通知メッセージが表示されない場合があります。</p> <p>以下のパッチを適用してください。  120011-14 以降 SunOS 5.10: kernel patch</p>
16	6505921	<p>I/O correctable error が多数発生すると、多数の SUNOS-8000-IL メッセージがコンソール上に表示されます。</p> <p>以下のパッチを適用してください。  120011-14 以降 SunOS 5.10: kernel patch  125369-05 以降 SunOS 5.10: Fault Manager patch</p>
17	6508432	<p>Correctable エラー(CE)が大量に発生した場合、修正可能なエラーであるにもかかわらず、システムがパニックすることがあります。</p> <p>etc/system に以下の設定を行い、システムをリブートしてください。  set pcie:pcie_aer_ce_mask = 0x2001</p> <p>この問題は、以下のパッチで修正されました。パッチを適用した後は、回避方法は不要になります。  120011-14 以降 SunOS 5.10: kernel patch</p>
18	6508434	<p>PCI Hot Plug 機能により、PCI-X カードの増設を行うと、ドメインがパニックする場合があります。</p> <p>以下のパッチを適用してください。  120011-14 以降 SunOS 5.10: kernel patch</p>
19	6509337	<p>s10s_u3 WAN ブートに失敗し、サーバが「416:Requested Range Not Satisfiable」を返しました。</p> <p>Solaris 10 11/06 には、有効な回避方法はありません。  この問題は、Solaris 10 8/07 以降で修正されました。</p>
20	6510861	<p>Dual-Channel Ultra320 SCSI Card (SE0X7SC2F,SE0X7SC2X)"を搭載している場合、correctable error (CE) が発生するとパニックします。</p> <p>Dual-Channel Ultra320 SCSI Card (SE0X7SC2F,SE0X7SC2X)を搭載する場合は、CR 6508432 の回避方法で設定している pcie:pcie_aer_ce_mask の値を 0x2001 から 0x31c1 に変更してください。</p> <p>これらのエラーをマスクするには、以下を/etc/system のファイルに追加してから、システムをリブートしてください:  set pcie:pcie_aer_ce_mask = 0x31c1</p> <p>この問題は、以下のパッチで修正されました。パッチを適用した後は、回避方法は不要になります。  125100-07 以降 SunOS 5.10: Kernel Update patch</p>

No.	CR ID	説明
		回避方法
21	6511374	<p>システム構成変更後、予期しないエラーメッセージがコンソール上に表示されることがあります。</p> <p>例:  <b>WARNING: Translation error source /LSB0/B0/0, PA 3c00000000, target /LSB0/B0/20000000</b></p> <p>このメッセージは無視しても差し支えありません。  この問題は、以下のパッチで修正されました。  137137-09 以降 SunOS 5.10: kernel patch</p>
22	6520990	<p>Dynamic Reconfiguration(DR) によるカーネルボードの deleteboard を実施した場合、ドメインがパニックすることがあります。</p> <p>この問題を回避するために、以下を /etc/system のファイルに追加してからリブートしてください。  set drmach:fmem_timeout = 30</p> <p>この問題は、以下のパッチで修正されました。パッチを適用した後は、回避方法は不要になります。  120011-14 以降 SunOS 5.10: kernel patch</p>
23	6522433	<p>CPU ハードエラーが発生した後、ドメイン上の fmdump(1M) で表示される故障コンポーネントが誤って表示されることがあります。</p> <p>XSCF でシステムステータスを確認してください。  この問題は、以下のパッチで修正されました。  127127-11 以降 SunOS 5.10: kernel patch</p>
24	6527811	<p>PCI カードを搭載した PCI ボックスを PCI hotplug で追加した場合、PCI ボックス内の PCI カードの情報が XSCF の showhardconf(8)で表示されません。同様に、マシン管理のハードウェア構成情報表示機能においても、その PCI カードの情報が表示されません。</p> <p>以下のパッチを適用してください。  128346-01 以降 SunOS 5.10: pcihp patch</p>
25	6530288	<p>cfgadm(1M) で表示される Ap_Id が正しく表示されないことがあります。</p> <p>以下のパッチを適用してください。  120011-14 以降 SunOS 5.10: Kernel patch</p>
26	6532215	<p>ドメインのブート時に volfs や dscp サービスの起動が失敗することがあります。  svc:/platform/sun4u/dscp:default: Method "/lib/svc/method/svc-dscp start" failed with exit status 95.  svc:/system/filesystem/volfs:default: Method or service exit timed out. Killing contract 59.</p> <p>ドメイン起動後にサービスを再起動してください。  本問題を事前に回避する場合は以下を設定してください。</p> <pre># svccfg -s dscp setprop start/timeout_seconds=count: 300 # svccfg -s volfs setprop start/timeout_seconds=count: 300 # svcadm refresh dscp # svcadm refresh volfs</pre>
27	6534471 6718173	<p>ドメインがパニックすることがあります。</p> <p>以下を /etc/system に設定し、ドメインをリブートしてください。  set heaplp_use_stlb=0</p> <p>CR:6534471 はパッチ 125100-06 以降で修正されましたが、CR: 6718173 は修正されていません。そのため、上記の回避方法は必要です。</p>

No.	CR ID	説明
		回避方法
28	6473457	<p>Solaris 標準のファイバチャネルドライバを使用し、下記のホストバスアダプタを使用する場合の注意事項があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● XSEFC401AF</li> <li>● XSEFC402AF</li> <li>● XSEFC401AU</li> <li>● XSEFC402AU</li> </ul> <p>cfgadm コマンドで、ファイバチャネルスイッチ環境に接続したディスクアレイ装置の切り離しを行うと、エラーを表示し失敗することがあります。</p> <p>また、マルチパス(MPxIO)構成で、片側パス切り離しを行うと、パスの両系が閉塞することがあります。</p>
		<p>以下のパッチを適用してください。</p> <p>125100-04 以降 SunOS 5.10: Kernel Update patch</p>
29	6518348	<p>Solaris 標準のファイバチャネルドライバを使用し、下記のホストバスアダプタを使用する場合の注意事項があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● XSEFC401AF</li> <li>● XSEFC402AF</li> <li>● XSEFC401AU</li> <li>● XSEFC402AU</li> </ul> <p>ファイバチャネル接続されたディスクアレイにて、パス障害が発生した場合、パニックが発生することがあります。</p>
		<p>以下のパッチを適用してください。</p> <p>125184-02 以降 SunOS 5.10: Sun Fibre Channel Device Drivers</p>
30	6536564	<p>I/O デバイスでハードエラーが発生した場合、Solaris Fault Management Architecture が正しい診断をしないため、XSCF 上の showlogs(8)や showstatus(8) コマンドが誤った故障箇所を表示することがあります。</p>
		<p>“3.3/I/O デバイスの故障箇所が誤って表示される問題について”を参照してください。</p> <p>この問題は、以下のパッチで修正されました。パッチを適用した後は、回避方法は不要になります。</p> <p>125369-05 以降 SunOS 5.10: Fault Manager patch</p>
31	6539243	<p>SPARC Enterprise T1000/T2000 サーバにおいて、Solaris 10 8/07 をインストールすると以下の予期しないエラーメッセージが通知されることがあります。</p> <p>Sep 19 12:14:57 xxxx ldc: [ID xxxxxx kern.warning] WARNING: ldc: cannot negotiate hypervisor LDC services group: 0x101 major: 1 minor: 0 errno: 22</p>
		<p>システムには影響のないメッセージですので、このメッセージを無視してください。</p> <p>この問題は、以下のパッチで修正されました。</p> <p>127127-11 以降 SunOS 5.10: kernel patch</p>
32	6620322	<p>SPARC Enterprise T5120/T5220 サーバにおいて、PRIMECLUSTER GDS でミラーを構築している場合、システムブート時にパニックすることがあります。</p>
		<p>以下のパッチを適用してください。</p> <p>127111-09 以降 SunOS 5.10: kernel patch</p>



**FUJITSU**